

優波提舍の語義についてその検討を終わりたいと思う。こゝでは前述したように無量寿經優波提舍は無量寿經の本来の意味、本当の教えに近く、そして人々にわかりやすく説き示す為に世親がそういう題目にしたのではないであらうか。次に願生偈とは、世親自らが彼の安樂國に往生したいと願求することを述べた偈頌の意味である。

## 仏教における、いわゆる神觀念について

小 野 泰 昭

宗教のいづれを問わず、聖觀念をとり除いて、それらの存在はあり得ない。

「聖」とは、やゝもすれば神秘のヴェールが被せられ、ことさらに、我々にとつて不可知の怖れ多いものであるとの一般的解釈がなされ、その結果、宗教の本来の姿についての誤解を導いているようであるが、決してその様なものでなく、聖とは奇跡、奇瑞、不思議の形容ではな

くて、宗教的実践の結果、導きだされる実践者の獲得する智慧の形容であり、その尊さの総称でなくてはならないし、それによつて人々が日々に新しい生命を、身のうちに附与されるものでなくてはなるまい。

聖への觀念は「神」という語によつて述べられているのが普通であり、仏教の場合においては、それが「仏」なる語によつて表わされているのは周知のことである。

キリスト教は、一言に言えば、神中心の宗教であり、神への追求がその学のすべてをなしていることは、キリスト教学が神学と同一内容をもつことからしても明らかなどころであり、西洋における宗教学が比較宗教学に至る前提の間、神への考察にそのすべてがあつたとしても間違ひはない。

仏陀は無師独悟の人であつたし、キリストは、あくまでも神の使徒であつたという両宗教成立の基盤の相違は、それぞれに独自の性格を与えたようである。

仏教の成立は歴史的事実の人によつて、唯一人の師もなく、天啓も与えられずして、なされたわけである。当

初、人々は教祖の人格に尊崇の念を抱き、その歩むべきを教わった筈であるし、それで満足した。ところが教祖の逝後、追慕の念が、歴史的実在の人をして常人と異つた存在であるとの考を生ぜしめ、こゝに仏陀観、ひいては、仏教の聖觀念の誕生がみられるのである。

渴仰の対象を遺骸に求め、遺教遺法に求めることより、さらに、未来世にもう一人の仏の出現を予想したり、又過去世にも仏の存在していたとの説を出すに及び、歴史的仏陀から正しく出発したものが数々の考察をその人になすに至つて、仏教の思想的發展に度が加つてくるわけである。過去仏説の如きは、仏陀が先師をもつており授記を得たとし、その結果、人々を救済のためこの世に出現したのだと述べているわけで、明らかに仏を、唯一の人でないとみなしているのである。又仏は真身と生身の二身からなるとし、その真身は所謂「法」であり、生身は歴史的事実の人を指すとする説や、この場合の生身を化身となして、真仏と我々との仲介的存在とみている説も出現した。しかしながら、このような諸説は、一般

に小乗的それであつて、仏陀への考察がより深まり、所謂仏身論の形を整えて仏教的神觀念の成立がみられるのは、大乘興起以後のことであつた。

大乘の標題は、人即仏であり、我々も仏になる可能性を有しているということである。この点、大乘の独自性は他の宗教に大きく異なるものをもつていると言ひ得るわけである。仏が釈迦に限られた時、果たして釈迦一人が一切の衆生を救済し得ようか、おこがましいかも知れないけれど、我々は救われるだけでなく、救わなくてはならないわけである。如何にして救われ、救うのであらうか！

大乘の興起以後、現在十六恒沙仏の存在説が述べられ、それらは、我々の等しく願望するところの理想を具現し、その理想郷たる報土に在るといふ。このことはとりもおさず我々の宗教的願望が、満たされ得ることを示すものである。願望を満す為には、所謂菩薩行道の実践が課題となつてくるわけである。この課題は、淨土教的解釈を試みるならば、あくまでも、我々の現世における、生

活を「法」を遵守して、歩むことになり、内に利他の心づもりを忘れない生活維持が、そのまゝ我々の報いを約束するのであり、報われた世界では、すでに永遠の生命を有し、正しく仏となりて往生することができるということである。

仏を分けて、三身、もしくは四身、十身等の説が述べられたゆえんは、すべて成仏の過程を説示せんが為のものであつた。

仏とは絶対的他者でなく、超越的なそれでもない。その聖なるものは、実は我々の会得し得るものである。救いへの願望のうちに、我々はすでに救われているのではないであらうか！

仏教における聖観念、即ち仏とは宗教的願望を抱くことから、それへの成就までの総称ではあるまいか！

「法」のみ追求するとき、仮りに宇宙法則をそれにあてはめるなら、理的な余りにも冷い生命の嗅味のないものになり、その遵守なら、仏教は自覚教に墮し、精神修養の一手段となつてしまう。又、成仏にのみ重点を置き

ば、それは、理想主義に走つてしまつて、今日の生活を懷疑的な眼でみつめることになつてしまう。今日科学の驚異すべき発達は、人々をして、観念的な神の存在を認め難くしているし、複雑な社会機構の生む数々の矛盾は、もはや、人々に知的な神の愛を信じる余裕を与えてくれない。しかし、宗教意識における神、仏とは、哲学におけるが如くに実在についての合理的思索によるものでなく、宗教行為の中で体験されるものである。

仏という観念が、机上で云々されるのは間違つているのかも知れない。学知に優る信知が仏についての諸々の考察をなし來つたのである。信の相が各人で異れば仏の把握のし方も異つてこようが、それはそれで是認すべきであらう。教法にのつとつた宗教的実践行為のうちに仏は、心眼にて可視であらう。

我々は、仏になれるのであるから、よろしく仏陀の教法を知りて、各説かれるところの、実践行為に励むべきであり、そうすることにおいてのみ、仏も近い存在となるのである。